



国家汉办/孔子学院总部
Hanban / Confucius Institute Headquarters

北陆大学出版会
南京大学出版社

苏 轼

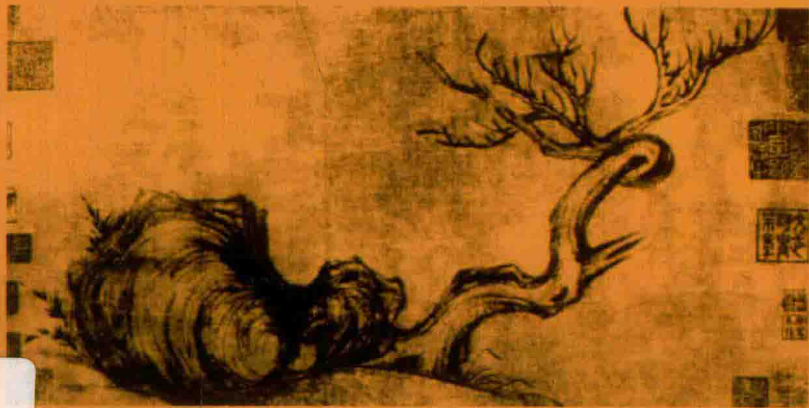
《中国思想家评传》简明读本·日中文对照版

主编 周宪 程爱民

童强 著

赵建勋 译

樱田芳树 监译



苏轼

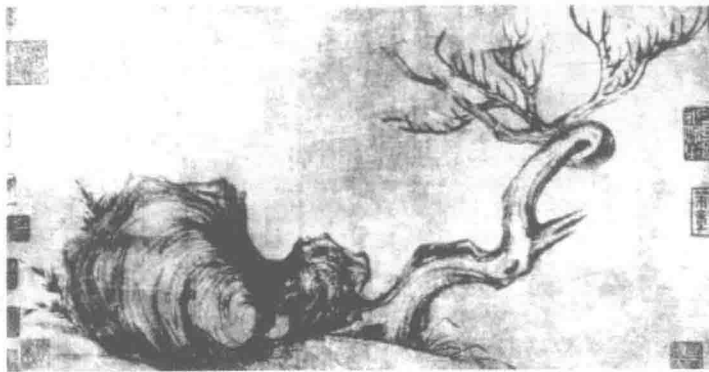
《中国思想家评传》简明读本·日中文对照版

主编 周宪 程爱民

童强 著

赵建勋 译

樱田芳树 监译



北陆大学出版会
南京大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

苏轼:汉日对照 / 童强著;赵建勋译.—南京:
南京大学出版社,2015.10

(《中国思想家评传》简明读本)

ISBN 978-7-305-15834-6

I. ①苏… II. ①童…②赵… III. ①苏轼(1036~
1101)—评传—汉、日 IV. ①K825.6

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2015)第 199742 号

出版发行 南京大学出版社
社 址 南京市汉口路 22 号 邮 编 210093
出 版 人 金鑫荣

丛 书 名 《中国思想家评传》简明读本·日中文对照版

书 名 苏 轼

著 者 童 强

译 者 赵建勋

监 译 樱田芳树

责任编辑 田 雁 编辑热线 025-83596027

照 排 南京紫藤制版印务中心

印 刷 常州市武进第三印刷有限公司

开 本 850×1168 1/32 印张 9.75 字数 232 千

版 次 2015 年 10 月第 1 版 2015 年 10 月第 1 次印刷

ISBN 978-7-305-15834-6

定 价 32.00 元

网址:<http://www.njupco.com>

官方微博:<http://weibo.com/njupco>

官方微信号:njupress

销售咨询热线:(025)83594756

* 版权所有,侵权必究

* 凡购买南大版图书,如有印装质量问题,请与所购
图书销售部门联系调换

《中国思想家评传》简明读本·日中文对照版

编辑委员会

主 任 许 琳 张异宾

顾 问 北元喜朗

副 主 任 马箭飞 周 宪 周 航

编辑委员 马箭飞 王明生 王 涵 左 健 田 雁

许 琳 吕浩雪 张异宾 村田和弘 周 宪

周 航 周 群 金鑫荣 泉洋成 胡 豪

夏维中 徐兴无 笠原祥士郎 蒋广学 程爱民

主 编 周 宪 程爱民

本 读 本

由南京大学出版社与北陆大学出版会共同出版。

日文版的版权属北陆大学出版会所有。

日中文版的版权属南京大学出版社所有。

序

古代中国は人類の文明にとっても精神にとっても、ゆりかごのようなものです。

ドイツ人哲学者カール・ヤスパース(Karl Jaspers, 1883年～1969年)の見解によれば、エジプト、メソポタミア、インド、中国の四大文明の発祥の後、紀元前800年から紀元前200年の間、おもに紀元前500年を中心に、世界中に連続した体系的な文明がふたたび生まれたということです。この時代のことを彼は枢軸時代(Axial Age)と呼んでいます。これらの文明には大思想家たちが現れ、彼らは人類や世界の根源的諸問題について思索し、^{げだつ}解脱や超越の目標と方法について示唆したのです。たとえば、中国の孔子、老子、墨子、荘子などの思想家たちや、インドのウパニシャド(奥義書)や釈迦、ギリシャの詩人ホメロス、悲劇詩人のトゥキュディデイス、哲学者のヘラクレイトス、プラトン、アリストテレス、さらにパレスチナの思想家たちが、中国、インドおよび西方諸国の、それぞれ相互に交流のない地域において、ほとんど同時に出現したのです。そして、彼ら大思想家たちが創り上げた思想的様式および世界的な宗教は、現代もなお人類に精神のよりどころとされていて、彼らは今もなお我々の生活とともにあるのです。

さて、中国五千年の文明の歴史を座標として、ヤスパースの視点を重ね合わせると、紀元前551年から紀元前479年の間に生きた孔子は、まさに中国文明がこの枢軸時代にさしかかったころの代表的人物であり、彼はこの五千年の中間点あるいは折り返し地点にあったと言えま



す。黄河文明の発祥から孔子の時代に至るまでと、孔子の時代から我々の現代に至るまでは、ともにそれぞれ2500年前後を数えることができます。孔子が現われる前には、中国に思想というものはあっても思想家は存在しませんでした。孔子以降、中国にも古代思想家たちが次々と現れて、彼らは中華民族だけでなく全人類にとっても価値のある豊かな思想的遺産を残したのです。孔子が唱えた「故きを温めて新しきを知る」^①とか「信じて古えを好む」^②といった思想上の原則は、中国の伝統を重んじるという姿勢に影響を及ぼしました。すなわち、古人の思想的遺産を尊重し、立ち止まることなく古人の思想を理解しそれを発展させ続け、その中から思考や宇宙・社会・人生問題に対応するためのすべを人々は獲得したのです。このことこそが、我々が今この『中国思想家評伝』簡明読本版(日本語版『中国著名歴史人物伝集』)を世に問う理由でもあります。

中国の悠久なる古代思想史を見渡すと、思想家たちが貢献した成果には深い造詣と高い価値があり、それは世界思想史上において独自の旗印を掲げるものとなりました。それら数々の思想は現代の中国あるいは世界にとっても、日々新しく生まれ、生命力にあふれたものと言えます。百家争鳴の先秦諸子、スケールの大きな含蓄のある漢や唐の経学^③、親しみやすく幽玄な魏晋の玄学^④や、知性を尽くした宋や明の理学^⑤など、

① 『論語』「為政」。(訳者注)

② 『論語』「述而」。(訳者注)

③ 儒教古典の解釈学。(訳者注)

④ 『老子』『莊子』『易』を尊崇する学風。(訳者注)

⑤ 人間の道徳性や天と人を貫くことわり(理)を追求する新儒学。(訳者注)

どれも思想学術のあでやかな花であり、仏教の色即是空の悟りや道教の神仙修養は宗教的信仰の沃土よどと言えましょう。そのほかにも、経世済民^①の政治・経済思想や自然の理をも乗り越えようとする巧みの科学技術や工芸の道、風雅の真髓に迫り、彩りの落ちることのない文学芸術……これらすべてにわたって豊かな思想を醸かもし出しています。中国の思想はそれぞれが時には水と火の関係のように相容れることなく激しく論争し合ったかと思うと、さまざまな思想が合致し合い、道は異なれども同じところに行き着いたりしましたし、また、いろいろな学派が生まれ林立したかと思うと、それらが互いに啓発し合い、奥義を究めていったりしました。儒、仏、道の三教も論争のなかから融合し、さまざまな思想がともに行われて、対立しませんでした。このように、中国思想の成立は豊富で多彩なものであり、天人合一^②、知行合一^③、剛健中和^④などの精神的伝統を貫きつつ、継承や解釈をしていきながら変遷し、一代ごとに研ぎ澄まされ、総合と新奇の特色を表し続けてきたのです。

中国古代思想史には、思想家とか思索者とか、哲学者などといった言い方や概念はなく、聖人、賢人、哲人、智者、諸子、大師などの呼称があるだけです。とはいえ、こうした呼称こそがまさに中国古代思想家の特徴を概括していると言えます。彼らの社会的身分は、たいていが教師か学者でしたが、それは彼らの思想が道徳と智慧ちえを追求したものだっ

① 世を治め、民の苦しみを救うこと。(訳者注)

② 人の行為は天と連動していることを強調する考え方。(訳者注)

③ 知って行わないのは、未だ知らないことと同じであることを主張した実践重視の教え。(訳者注)

④ 強く健やかでありつつ、異なる性質を持った者同士が交わること。(訳者注)



たからです。もちろん、より広い範囲から見れば、中国古代思想は、政治、軍事、経済、法律、工芸、科学技術、文学、芸術、宗教など多くの文明的領域において、大きな貢献をしましたが、創始者や集大成者など傑出した人物の言論や著作、あるいは弟子たちによってまとめられた言行録などこそが中国古代思想の重要な内容なのです。中国人は、孔子以前にすでに、「功を立て」、「徳を立て」、「言を立て」るの「三不朽」といった、超越を追求するための道しるべを作り上げましたが、これら人類社会のためにうち立てた大きな功績、個人的道德修行の完遂と思想、智慧、学説などのすべてはまさに不朽の歴史的遺産とも言えます。こうした意味から言えば、中国思想家たちの手による成果は、我々現代人が慣れ親しんだ職業思想家、哲学者あるいは宗教的先知をも大きく超えていると言えましょう。そして、我々が『中国思想家評伝』簡明読本を執筆するにあたって、こうした基準に基づいて思想家たちを選びました。

さて、南京大学名誉学長の故きょう あめい匡 亜明教授の監修を仰いで、南京大学出版社より出版された『中国思想家評伝叢書』は、中国 20 世紀以来、最も広大な中国思想家研究の成果と言えましょう。今回、簡明読本叢書の編集出版にあたって、まずこの200 冊にもおよぶ『中国思想家評伝叢書』の労苦に深い敬意を表すものであります。この巨人の双肩に依りつつ、本簡明読本においても、学術的基礎を保持しながら、なおかつそこにいくらかの新鮮味を加えたつもりです。その新鮮味とは内容は深いままに表現は分かりやすくし、より広範な読者をも惹ひきつけるものにしたことであります。思索と読みやすい表現、生き生きとした物語と智慧……中国文化の「拡大」と文化のグローバル化を提唱する今日、この読本による古代中国思想家たちの紹介を通して、中国思想に関心

を持たれる読者のみなさんが、我々と古人たちとがともに直面する一つ一つの問題を掲げながら、古代の中国思想家たちと胸襟を開いた対話をされることを期してやみません。

編集委員会

2008年9月

目次(日文版)

序	i
一、成長:髪を ^き 載 ^ま って万騎の先と ^な 作らんことを願う	
——髪を切って先駆となることを願う	1
二、初仕:我初めて ^{まつりごと} 政 ^ら に従い魯叟 ^{まみ} に見ゆ	
——初めて地方官に就任する私は、孔子を拝した	18
三、理趣:廬山の真面目を識らざるは	
——廬山の真の姿がわからないのは	26
四、新政: ^{みすみす} 眼看時事は力に ^た 任せ難し	
——見る間に時事はもう私の手におえなくなった	35
五、外任: ^{ただ} 惟農を ^{あわれ} 憫むの心尚お在る有り	
——農民を憐れむ心がまだあるだけなのだ	50
六、烏台:平生の文字吾が ^{わずら} 累いとなる	
——生涯、私は筆禍に苦しんだ	72
七、黄州: ^{また} 也風雨も無く ^{また} 也晴れも無し	
——風雨の日も晴れの日も平気だ	88
八、学士:禁省に相望むも亦偶然	
——役所で当直になって会えないことも偶然なこと	129
九、惠州:報じて ^い 道う先生は春睡 ^{うま} 美しと	
——先生は春の眠りをお楽しみ中と報せた	145



- 十、儋州^{たんしゅう}：家は牛欄の西復た西に在り
——家は牛飼い場の西の西にある …………… 160
- 十一、回帰：青山一髪是れ中原
——青山が一筋の髪の毛のように見えるところが、中原だ …… 175
- 訳者あとがき …………… 185

目录(中文版)

序	189
一、成长:截发愿作万骑先	193
二、初试:我初从政见鲁叟	202
三、理趣:不识庐山真面目	206
四、新政:眼看时事力难任	211
五、外任:惟有悯农心尚在	219
六、乌台:平生文字为吾累	232
七、黄州:也无风雨也无晴	240
八、学士:禁省相望亦偶然	263
九、惠州:报道先生春睡美	272
十、儋州:家在牛栏西复西	281
十一、回归:青山一发是中原	290

一、成長:髪を截^きって万騎の先と作^ならんことを願う
——髪を切って先駆となることを願う

蘇軾(1037—1101)は、自ら東坡居士^{とうぱ}と号したため、東坡、蘇東坡と呼ばれ、字は子瞻^{しぜん}といます。古代の書籍の中では、彼は蘇子ママと呼ばれていました。彼は中国北宋時代の偉大な文学者で、中国文学史上とても地位の高い人物です。あなたは蘇軾の作品をあまり読んだことがないかもしれませんが、おそらく「廬山^{ろうざん}の真面目を識^しらざるは、只身の此の山中に在^よるに縁^よる」^①という詩句は聞いたことがあるでしょう。これは蘇軾の詩句です。彼の詩は素晴らしく、各種の様式に長け、多様な風格を兼ね備え、情趣、哲理が豊かです。あなたは蘇軾がどんな文章を書いたか覚えていないかもしれませんが、「赤壁の賦」はきっと知っているでしょう。彼の文章は素晴らしく、長江黄河のように、一瀉千里^{いちしゃせんり}の勢いがありながら、言葉遣いが婉曲で、変化の妙を極めつくしています。明の時代に、彼は「唐宋八大家」の一人とされ、唐代の韓愈、柳宗元、宋代の歐陽修、王安石などと共に唐宋時代の最も有名な文章家に選ばれました。あなたは蘇軾の詞^②を読んだことがないかもしれませんが、おそらく王菲^③の歌う「但^{ただ}人の長久ならんことを願う」という歌は聞いたこ

① 蘇軾「西林の壁に題す」『蘇東坡詩集』巻二十三/p1219 中華書局*82。(訳者注)

② 韻文形式の一種。唐代に始まり、宋代に盛んになった。もとは音楽に伴奏されて歌われて、一句の字数が不定な歌謡であった。宋代に確立・流行したので、「宋词」が「詞」の代表とみることもある。「詩余」、「長短句」ともいう。(訳者注)

③ 王菲(フェイ・ウォン)は「アジアの歌姫」と呼ばれ、中国を代表する歌手で、日本でも大活躍した。(訳者注)



とがあるでしょう。この歌の歌詞は蘇軾の詞「水調歌頭」^①です。これはおそらく中国古代の詩詞として現代のポピュラー音楽の中で一番広く知られている作品です。蘇軾の細やかで優しい婉曲な詞はもちろん素晴らしいのですが、彼の豪快な詞はそれ以上に新意があり、広大な構想と情趣で、新しい詞の風格を打ち立てました。蘇軾の古文^②は宋代第一、蘇軾の詩歌は天下第一と言う人もいれば、蘇軾の詩文は宇宙一ときっぱり言い切る人もいます。いずれにしても、蘇軾は語るに値する大文学者なのです。

蘇軾は眉州眉山(今の四川省眉山市)出身で、文学にゆかりのある家庭に生まれました。祖父の蘇序^{そじょ}は詩を書くことを好み、また父の蘇洵^{そしゆん}は北宋の有名な文章家でした。

父の蘇洵は少年時代、本を読むのが嫌いで、遊侠を好む少年でした。しかしのちに、発奮して本気で勉強し、文章を書き始めたのです。数年後、彼の文章はなんと、その当時の文壇の主導者である歐陽



蘇軾画像

修に認められ、あつという間に有名になりました。蘇洵が京師にいた頃、多くの青年が彼に古文^②の教えを求め、次々に彼の文章の書き方を

① 詞牌の一種。詞牌とは、詞が歌われるメロディーの名称。たとえば「水調歌頭」、「西江月」、「卜算子」など。(訳者注)

② 唐代の韓愈、柳宗元が六朝の美文以前の漢の文章を模範として確立した文体。(訳者注)

手本としました。蘇軾には蘇轍(字は子由)という弟がおり、蘇轍も当時、有名な文学者でした。この兄弟二人そろっての文学での成功は、父の蘇洵の心を尽した指導と切っても切り離せないものでした。

明代の人が唐宋時代の有名な文学者の文章を編集した時、まず韓愈、柳宗元、歐陽修、蘇洵、蘇軾、蘇轍、王安石、曾鞏の八人の作品を選びました。これ以降、文章を編集する際は、いつもこの八人の作品が選ばれるようになり、「唐宋八大家」という言い方は次第に浸透し、人々に認められるようになりました。八大家には、唐代から韓、柳の二人が選ばれ、宋代からは六人が選ばれました。宋代の六人の中に、蘇氏一家の親子三人が選ばれたことは、文学史上非常に珍しいことなのです。

母の教育は蘇軾の人生に大きな影響を与えました。蘇軾の母の程氏は、読書家の家柄に生まれ、非常に教養あり、事理に明るい女性でした。蘇軾が幼い頃、母はいつも古代の有名な志士の功績を語り、息子を励まし、高遠なものを目指し、事業を成し遂げるよう激励しました。母親はかつて彼に後漢の名士范滂はんぱうの物語を語って聞かせました。古代の名士というのは名節清廉にして徳行のすぐれた人です。范滂は少年時代から正直で高潔な人で、朝廷の役人となつてからは、「車に登り轡くつわをとり、慨然として天下を澄清にせんと志を持ち」^①、不正行為をなくし、風紀をよくしようと決心しました。地方の汚職をしていた役人たちは范滂が来ると聞くと、時に利あらずとばかり、次々と逃げ出しました。後に范滂は宦官に反対したため、ついには殺害されてしまったのです。事件当時、彼は他の人に累が及ぶことを恐れ、泰然と落ち着いて刑に赴

① 「後漢書」列伝五十七党錮伝、以下の挿話も同范滂伝に基づく。(訳者注)



きました。別れに臨んで、彼が母に悲しまないでくださいと言うと、母親は「お前は今死ぬことで、人徳のある高潔な人物と同じ名声を得るといのに、恨むはずがないでしょう」とこたえました。まだ十歳だった蘇軾は、この話を聞き、とても感動し、母を見上げてたずねました。「お母さま、もし私が大きくなり范滂のようになってしまったとしても、それをお許しになりますか。」すると母は答えました。「お前が范滂のようになれるのなら、私が范滂の母のようになれるはずはないでしょう」と。

蘇軾は母親の言葉に励まされ、小さい頃から天下の為に大事業を成し遂げようという志を持つようになりました。その当時、郭綸というごく普通の兵士がいました。郭綸は勇敢で、戦術にも長け、何度も手柄を立てていました。彼は、戦争の前に自分の髪を切ることで、誓いを立てたことがあります。それは先陣を受け持って、勇敢に戦うということの意味しています。蘇軾・蘇轍兄弟は、若い頃二人そろって郭綸をほめたたえる詩を書き、自分たちを奮い立たせました。「髪を截^きって万騎の先とならんことを願う」^①は、蘇軾のその詩の一句です。

蘇軾は八歳^②で学校に入学しました。三年後、両親の指導の下で引き続き勉学に励みました。彼は努力家だったので、とても進歩が速く、読

① 「郭綸」『蘇軾詩集』巻一/p4。（訳者注）

② 「満年齢」の数え方以前は日中ともに「数え年」と言って、誕生と同時に「一歳」になり、正月元旦になると、誰もが一つ年をとる年齢の数え方をした。だから満年齢の数え方と比較すると、人はいつでも自分の年を、誕生日の来るまでは二歳多く数え、誕生日が来てからは、いくつになっても一歳多く数えることになる。蘇軾は旧暦景祐三年十二月十九日に生まれ、次の年の元旦には、やっと二週間しかたたない彼が「二歳」になったことになる。本書では、数え年年齢表示である。（訳者注）

一、成長：髪を截^きって万騎の先と作らんことを願う

書と作文以外に、琴、囲碁、書道、絵画などの芸術も学びました。中国の書道と絵画は通じる部分がたくさんあります。書道も絵画も筆と墨を使いますし、技法にも通じるところがあります。そのため、絵画を好む人のほとんどは書道も好みます。東坡は絵画を好み、書道も甚だ愛し、一生少しも飽きることはありませんでした。

蘇軾は少年の頃、勉強以外のことにも興味を持っていました。彼は、田舎で風情のある少年時代を満喫していました。大人になり、彼は詩や文章の中で、度々少年時代の思い出にふけています。たとえば、木を植え、水をかけ、梨をもぎ、栗を拾い、友達と一緒に鳥の巣をのぞいたり、兄弟と一緒に水泳をしたり、山に登ったりもしました。そして、牛や羊を放牧しながら、読書をしていたときの情景は、ずっと記憶に残っていました。

我昔田間に在り

但^だ羊と牛の事のみ知る

川平らかに牛の背は穏やかにして

百斛^{ひゃく}の舟に駕するが如し

舟行きて人無く岸自ずから移り

我臥して読書するも牛知らず^①

夜になると、蘇軾はお年寄りの尼のそばに座り、その尼から蜀主孟

① 蘇軾^{ちやうえつ}「晁説「考牧図」の後に書す」。「蘇軾詩集」卷三十六/p1966(ページ数は訳者付加)、中華書局 1982 年出版。(原注、訳者注の断りのないものは皆原注)